

Sanctuary と *Sanctuary: The Original Text* における Horace Benbow の物語

岡 田 大 樹

1. はじめに

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) の長篇小説『サンクチュアリ』(*Sanctuary*, 1931) に二種類のテキストが生じた経緯は広く知られている。フォークナーは1929年5月に本作の原稿を出版社ケープ&スミス (Cape & Smith) へ送ったが、その暴力的な内容に出版は見送られた。しかし約一年半後の1930年11月、方針を変更した同社からゲラ稿が届き、これを読み直したフォークナーはその書きぶりに納得できず、徹底的な改稿を施したのである。こうして本作には改稿前・改稿後の二種類のテキストが存在することとなった。加筆・削除・テキストの順序の再配置が施された『サンクチュアリ』は1931年2月9日、彼の第六長篇として出版された (Polk, “Introduction” viii)。本論では、一般に『サンクチュアリ』として読まれるこの改稿後のテキストをSR (*Sanctuary Revised*) と呼称し、フォークナーの死後ノエル・ポーク (Noel Polk) の編纂で *Sanctuary: The Original Text* (1981) として出版された改稿前のテキストをSO (*Sanctuary Original*) と呼称する。

リントン・マッセイ (Linton Massey) によるSOの発見以降、この二種類のテキストの比較によって、本作改稿の実態を調査する研究が行われてきた。その多くは、改稿の際に主人公の弁護士ホレス・ベンボウ (Horace Benbow) の内面描写や過去の回想が大幅に削除され、彼と関わりあう女性

たちに対するホレスの屈折した意識がテキストに表出しなくなったことで、SRのホレスの人物像はSOに比べて単純化したと説明する（Massey 202-04; Millgate 115, 117; Beck 192-93; Langford 10-11）。

しかし改稿は、ただホレスの人物像を単純化したというより、作中における彼の経験やその意味自体を、根本的に変容させたというべきである。これは改稿の際に、ホレスの内面や過去の回想が削除されただけでなく、作中世界でホレスの経験する出来事自体が書き換えられたことに由来する。SOとSRは同一の作中世界を彷徨するホレスを異なる書法で描き分けた二作ではなく、似て非なる別々の世界を彷徨するホレスを異なる書法で描いた二作なのである。

マイケル・ミルゲイト（Michael Millgate）は、ポパイ（Popeye）によるトミー（Tommy）殺害とテンプル・ドレイク（Temple Drake）強姦の罪を着せられた容疑者リー・グッドウィン（Lee Goodwin）が、ジェファソン（Jefferson）の住人のリンチを受けて焼死する本作終盤の場面について、SOでは伝聞で簡潔に示されるのに対し、SRでは彼を弁護したホレス自身はその場を目撃する内容に改稿され、作品の暴力性が増したことを強調する（115）。しかし作中世界の出来事の差異という観点に基づくなら、この改稿はグッドウィンのリンチという出来事が、ホレスのジェファソンからキンストン（Kinston）への帰還の後に起こる出来事から、その前に起こる出来事に変化したものとして捉えられる。またこれに留まらず、SOとSRでは物語の発端となるホレスのキンストンからジェファソンへの家出の状況や、ホレスが妻ベル（Belle）に離婚を提起しようと手紙を書く時期も変化している。

これら外的経験の変化と呼応して、SOとSRではホレスの内的経験の様相もまた異なるものに変化する。しかし特にSOの文学的価値を主張する研究は、改稿によって省かれたホレスの内面描写をSRに適用することで、彼の人物像が「単純化」されたSRを補完し、SRを解釈しようと試みる傾向にある¹。ふたつのテキストでホレスの外的・内的経験が異なる以上、このようにSOとSRのホレスを同一視する解釈には危険が伴うだろう。本論ではSOとSRにおけるホレスの内的・外的経験の差異を重視し、各テキストにおけるホレスの物語を定位することを目的とする。

2. ホレスの家出を巡る改稿

SO と SR ふたつの『サンクチュアリ』は、いずれもホレスが妻ベルと彼女の連れ子リトル・ベル (Little Belle) と共に住むキンストンから、妹のナルシッサ (Narcissa) がサートリス (Sartoris) 家の未亡人として暮らすジェファソンまで家出することを物語の発端とする。しかし *Reading Faulkner: Sanctuary* において指摘されているように、SO のホレスの家出は、ふたつの『サンクチュアリ』共通の舞台である 1929 年 5 月時点よりも前から繰り返されてきた行為として描かれる一方で、SR ではこの時点で初めて行なわれるものに変化している (Arnold and Trouard 36)²。この変更はふたつのテキストにおけるホレスの家出の意味に影響を与えざるを得ない。

SO と SR における家出の意味の違いが明確に表れるのは、彼がキンストンからジェファソンへ向かう途中で逗留した旧フランス人屋敷 (Old Frenchman Place) で泥酔し、そこに暮らすグッドウィンら密造酒製造者たちに自身のことを語る場面である。SR の 2 章には直接話法でホレスの饒舌な語りの全容が記されるが、内容的に対応する SO の 4 章にはホレスの語りほとんど記されていない。ホレスが酔い語りをする状況の描写に紛れるように、以下のように短く示されるのみである。

... Horace talked on about courage, trying to establish himself with them, and suddenly he heard his voice saying “You see, I’ve just left my wife. Just took my hat and walked out.” ... [H]e continued to tell how he had left his wife, just walked out of the house because he couldn’t stand it any longer. (SO 50)

自らと彼らのあいだに関係を築こうと勇気について語るうちに、ホレスは自分が「妻を捨てて家を出た」と喋るのを聞く。ここで唯一、直接話法で記されている「妻を捨てて家を出た」という言葉は、ホレスが意識するより先に口を衝いた、無意識の願望のようなものであることが判る。

SO においてこの言葉は、この章の前後でホレスの独白として頻繁に繰り返される。“I’ve just left my wife,” he was saying. ‘Just took my hat and walked out’; getting himself across to them ... getting himself across to them, establishing himself: ‘You see, I’ve just left my wife.’” (SO 30) この記述は

SOの4章より前の2章に位置しているが、ホレスの旧フランス人屋敷滞在より後の時点で、ホレスが自身の酔い語りを回想して独白するものである。またSOの5章にも、同趣旨の記述がある。“‘You see, I left my wife,’ he said, trying to establish himself, get himself across to them ... ‘I’ve just left my wife,’ he said; ‘just took my hat and walked out’ ...” (SO 66) いずれの記述においても、不意に口をついたはずの「妻を捨てて家を出た」という言葉が、むしろ意識的に「彼らに受け入れてもらう」ため「自らを奮い立たせて」喋った言葉にされており、SOのホレスがこの言葉へ抱く強い執着が強調されている。

SOのホレスがこの言葉に執着する理由は、5章の記述から推論できる。ジェファソンに居残るために長年空き家だったベンボウ家を開けて掃除した夜、ホレスは旧フランス人屋敷に暮らす荒くれた男たちに釣り合おうと見栄を張って「妻を捨てて家を出た」と喧伝したことを後悔している。

Just before he went to sleep he was thinking ... of how, having blundered into that reality which he thought he was so hot for, his efforts to establish himself as a factor in it had been like those of a boy watching other boys do things he cannot or dare not attempt, and who performs the dwarfed mimicry of their skill or daring with a sort of raging importunity: Look at me! Look at me! Telling one man who had roughly brushed aside all the triviata of registered vows to carry the woman into what was practically a state of servitude, and another man who appeared to have dispensed even with love with a savage finality, that he had left his wife. . . . (SO 65)

ここでホレスは、「妻を捨てて家を出た」と語った自身の行為が「自分の出来ないことをやっている子供たちを見てそれを下手に真似する子供」のようだったと恥じている。SOのホレスが家出を何度も繰り返していることを考え合わせれば、ここで語られるホレスの屈託には、何度キンストンを離れても自分は結局ベルのもとに戻ってしまうのだという忸怩たる思いが影響していることが伺える。彼はベルのもとから離れたいと願い続けているにも拘らず、決意を固めて本当に「妻を捨てて家を出」ることが実行できておらず、もはや惰性的に繰り返すだけとなった家出という習慣につい

て、誇らしげに語ったことを恥じているのである。SOのホレスの「妻を捨てて家を出た」という言葉への執着は、今回こそは惰性的な家出に終止符を打ち、「妻を捨てて家を出た」という空虚な言葉を実現させるという願望の反映だと考えられる。

一方SRにおいて、この「妻を捨てて家を出た」という言葉が一度も登場しないことは注目に値する。SRのホレスはこれまでに一度も家出をしておらず、そのためSOのホレスがもつ「妻を捨てて家を出た」という行為を成し遂げられない自身の惰性に対する屈託を共有していないのである。

その代わりにSRのホレスは「ただ丘でひと休みしたいのだ」という表現を繰り返す。SOでもホレスは一度この言葉を口に出しているが(SO 20)、SRでは旧フランス人屋敷での酔い語りのなかで、この言葉を四回も繰り返している。“I thought that maybe I would be all right if I just had a hill to lie on for a while—It was that country.” (SR 16) “So I thought it was just a hill I wanted. . . .” (SR 16) “I just wanted a hill to lie on, you see. Then I would be all right.” (SR 17) “I just wanted a hill to lie on for a while.” (SR 17) ここでホレスが求める「丘 (hill)」という場所には、アメリカの理想を表現する“City upon a Hill”への含意や、フォークナーの初期散文「丘」(“The Hill,” 1922) や生前未発表原稿「恍惚」(“Nympholepsy,” 1974) で描かれる現実社会に対する聖域めいた丘のイメージに通じるものを見出せる。『サンクチュアリ』ではホレスがベルと住むキンストンという土地が、SOとSRいずれのテキストにおいても「肥沃 (rich)」で「汚れ (foul)」、「金を生みだす (engender money)」と表現されるように物欲的な性質をもった、「原住民たちが洪水時に避難するため作った盛土の他に丘などない」低地として描かれるために(SO15-16; SR 16)、ホレスが求める「丘」というものは、水はけの悪い低地キンストンと対照的な理想の土地として言及されていることが伺える。

SOのホレスは「妻を捨てて家を出た」と繰り返し、SRのホレスは「ただ丘でひと休みしたいのだ」と繰り返す。このように反復される言葉の違いは、ふたつのテキストで家出の意味が異なることを端的に示している。SRのホレスは理想の場所への到達を初めて志し、新たな行為として家出を敢行するのだが、SOのホレスは今度こそベルから脱却するために、もはや惰性となった数度目の家出を再び繰り返すのである。

3. 「不可侵性」と浸食する湿気

しかしここで明確にしておく必要があるのは、SOとSRにおける家出の意味は、まったく異質なものではなく、表裏一体のものだということである。ふたつのテキストの家出を異なるものにしてしているのは、SOのように現状から脱却できずにいるホレスを表現するか、SRのように理想を希求するホレスを表現するかという物語の焦点の差なのである。

いずれのテキストにおいても、キンストンという湿った低地の「肥沃」で「汚れ」た性質は、ベルの好色な性格と結びつくものとして描かれている。SOの4章とそれに対応するSRの2章において、ホレスはグッドウィンの内縁の妻ルビー（Ruby）に対し、毎週金曜日にベルの言いつけで嫌々ながら駅から海老の入った箱を運ぶ習慣を語っている。“[I]’s because the package drips. All the way home it drips and drips, until after a while I follow myself. . . thinking Here lies Horace Benbow in a fading series of small stinking spots on a Mississippi sidewalk.” (SO 56; SR 18-19) ベルが好んで食べる海老の箱から漏れる臭い滴のなかに自身が葬られているのだと言うホレスは、明らかにベルの性質が自身に染み込んでゆくことを嫌悪している。またSOとSRの2章では、ホレスがベルの部屋で口紅の付いたハンカチを見つける場面が語られるが (SO 18; SR 16)、布をべったりと汚す口紅というイメージもまた、好色な印象と共に、海老の滴が示すベルの湿った性質を共有している。いずれのテキストにおいても、ホレスはベルやキンストンが示すこうした湿気から脱却を試みて家出を敢行し、低地の湿気が届かない「丘」を目指しながら、かつて自身が生まれ育った町ジェファソンへと向かうのである。

ベルと低地が結びつく一方、ジェファソンと共に「丘」に結びつけられているのはナルシッサである。菊池昭が指摘するように、理想の「丘」を目指すホレスはナルシッサの「不可侵性 (imperviousness)」の庇護を求めてジェファソンへ向かう（「未改訂」3）。SOの1章とそれに対応するSRの16章に、そのことが記されている。“During all the four days between Kinston and Jefferson he had counted on that imperviousness. . . [H]e had expected that imperviousness, since she had had it thirty-six years.” (SO 8; SR 123) いずれのテキストにおいても、このナルシッサの「不可侵性」は、彼女が常にまとう白い服によって示されている (SO 33, 35, 39; SR 26, 27, 110)。彼女の

白い服は、汚れの付着しない無垢な状態を表し、同時にトミー殺害事件の後に彼女が発揮する自身の生活を保つための排他的な傾向も示し、また菊池によれば彼女の内面的潔白というよりむしろ世間にそれを誇示しようとする性状の表れでもあり（「手稿本 (II)」81）、多義的な象徴として機能する。しかしいづれにしても、ナルシッサの白い服はホレスが彼女に「不可侵性」のイメージを見ていることを鮮明に示している。このように表現されるナルシッサの「不可侵性」は、ベルやキンストンから逃げ出したホレスが庇護を求める性質として描かれるために、低地の湿気を寄せつけない「丘」の性質と同一視されることになる。SOとSRいずれのテキストにおいても、キンストンとベルは低地の湿気の体現者として描かれ、またジェファソンとナルシッサはこの湿気を寄せつけない「不可侵性」をもった「丘」の性質の体現者として描かれるのである。

このようにホレスの家出は、SOとSRの最大公約数的には、低地から「丘」への逃避行と定位できる。彼は周囲のものを浸食してゆく水はけの悪い低地から、その湿気の影響の及ばない「不可侵性」を保つ「丘」を目指すのである。ホレスが法律を扱う弁護士として設定されており、また多くの研究で理想主義的であると表現されることは（Millgate 119; Langford 11; 菊池「未改訂」8）、彼のこうした行動原理の根にある価値観を明確に示している。ホレスは様々な事物がひとつの系として自己完結的な「不可侵性」を保って機能する状態を尊んでおり、またその状態に憧憬にも似た執着を持っている。同時に彼は、その系を崩壊させてしまう力、ウォレン・ベック（Warren Beck）のいう「自然の秩序のなかで常に解放されて自身のエネルギーで増殖することを待ちかまえ、分解して破壊する力」（194）の影響を恐れ、そこから脱却することを求めるのである。

しかし、ホレスのこうした行動が徒労に終わることは運命づけられている。どんな丘もいつかは浸食によって崩れ去るからである。彼もまた、時に抵抗し敗北してゆくフォークナーの登場人物のひとりとして描かれている。SOの18章とそれに対応するSRの23章において、メンフィスの娼館でテンブルが語る旧フランス人屋敷での壮絶な経験を聞いたホレスが、ジェファソンへの帰り道で地球の地軸が軋む音を聞き、今まさにその自転が静止するか否かという瀬戸際なのだと言夢する場面は、彼のこうした強迫観念的な世界観をよく示している（SO 219; SR 233-34）。

ベルの連れ子リトル・ベルに対するホレスの意識にも、彼のこうした価値観が深く関わっている。SOとSRの2章に描かれる、彼女が行きずりの男を家に連れ込むことをホレスが止めさせようとする会話からも明らかなどおり（SO 14-15; SR 15-16）、SOとSRいずれのテキストにおいても、ホレスは彼女の処女性が侵犯される予感、というより彼女が処女性というものに価値を感じていないように見えることに危機感を抱いている。家出にもリトル・ベルの写真を持ち歩き、事あるごとに見つめているホレスは、デイヴィッド・マッデン（David Madden）の指摘するとおり、撮影された瞬間に固定されて「不可侵性」を保つ彼女に不安の解消を求めながら（106）、同時に写真の彼女の姿にも時の浸食による翳りを見出して動揺するのである（SO 146, 220; SR 174-75, 234）。ホレスにとって処女性という観念が女性の「不可侵性」の保たれた状態を意味していることは、彼の想像のなかでリトル・ベルが葡萄棚のイメージと共に語られるとき、彼女がナルシッサと同様に白い服を身にまとっていることから確認できる（SO 14, 145; SR 14, 175）。ナルシッサとリトル・ベルのイメージが重ねられていることについて、ジェラルド・ラングフォード（Gerald Langford）はSOにおけるホレスのリトル・ベルに対する関心を、ナルシッサへの「近親相姦の欲望」が移ったものだと説明している（20）。しかし諏訪部浩一が指摘するように、ホレスがリトル・ベルに性的な欲望を持っているとしても、リトル・ベルはベルと彼女の前夫ハリー・ミッチェル（Harry Mitchell）の娘であり、血が繋がらないホレスにとって近親相姦の対象にはなりえない（114）。本論では「近親相姦の欲望」ではなくホレスの「不可侵性」への希求が、ナルシッサとリトル・ベルを結びつけていると解釈する。

ただし菊池の主張するように、ホレスはリトル・ベルに性的な欲望もまったく抱いておらず、ただ自分の身を大事にしてほしいという親心でもって彼女を心配しているのだと断定してしまうわけにもゆかない（「未改訂」8）。ホレスが「不可侵性」を希求する一方で、それを浸食する性質をもつベルと結婚し、家出をしても結局は彼女のもとに戻ってしまう人間として描かれていることは、彼が「丘」の「不可侵性」を尊ぶ一方で、それを浸食する低地の湿気にも惹かれていること、というより彼は湿った地上的な引力から逃れられないが故に、天上的な「不可侵性」に憧憬を抱き続けていることを物語っている。時の流れに逆らって「不可侵性」を維持しようとする

る態度と、時の流れに身を任せて分解され、自他の境を消滅させようとする態度、ホレスは後者に引きずられながら前者を求め、その二極のあいだに囚われているのである³。

4. 「丘」から低地に変貌するジェファソン

ホレスの低地と「丘」の二極的な世界観を整理することで見てくるのは、SOのホレスは今度こそ低地の湿気から逃れようとして惰性となった家出を繰り返しており、SRのホレスは「不可侵性」を保つ「丘」を目指して家出を初めて敢行しているということだった。ふたつのテキストのホレスの内的経験は、家出という行為を巡る改稿に端を発して、彼がキンストンを出てジェファソンへ向かう物語の序盤の段階で、すでに分裂しているのである。

この後SOとSRいずれのテキストにおいても、ジェファソンに到着したホレスは、この地に居残るためベンボウ家に住み込む準備を始める。しかしポパイに射殺されたトミーの遺体がこの町に運び込まれ、逮捕されたグッドウィンも町の監獄に収容されると、ホレスはグッドウィンを弁護するためトミー殺害事件の調査を始め、その過程でジェファソンの住人が皆でグッドウィンと彼の内縁の妻ルビーを町から排除しようとしていることを目の当たりにし、「丘」と見定めていたジェファソンに幻滅してゆくことになる。

ふたつのテキストでのホレスの内的経験の分裂は、彼がトミー殺害事件を進める過程でも継続して認められる。しかしSOとSRにおける差異を検証する前に、ジェファソンに幻滅したホレスが「丘」への希求を口にしなくなることについて確認する必要がある。その代わりに彼は、いずれのテキストにおいても「ヨーロッパへ行く」と言い始めるのである（SO 77; SR 140）。

ホレスのジェファソンへの幻滅は、SOの6章とそれに対応するSRの17章において、サートリス家のミス・ジェニー（Miss Jenny）に対して吐露される（SO 71; SR 132-33）。そのなかでホレスは、町の住人たちがもともとグッドウィンの「良い客」だったにも拘らず、殺人事件の容疑者となった途端に彼の密造酒作りを告発しはじめたことに怒っており、またホレスが

無実だと信じるグッドウィンとその内縁の妻が、殺人者や姦淫者として教会の説教の主題に扱われることに怒っている。ジェファソンが「不可侵性」を保つために発揮する排他性を、ホレスが非難していることは一見すると矛盾しているが、ここでは重要なのは、ホレスは事件の発生以前に旧フランス人屋敷に逗留しているために、ベックやミルゲイトが指摘するように半ば私情からトミー殺害事件に関わっており (Beck 193; Millgate 118-19)、グッドウィン自身が認めないにも拘らず、彼の無罪という臆見を頑なに信じていることである。ホレスの信じるジェファソンの「不可侵性」は、彼自身がナルシッサの庇護を求めたように、彼が無罪と信じるグッドウィンやルビーをそのうちに匿って、彼らを浸食しようとする外界から保護するものでなければならない。そのため彼らを排斥しようとするジェファソンは、ホレスにとって理想的な「丘」とは正反対の存在になってしまう。これ以降ホレスにとって、ジェファソン、ヨクナパトーフア郡 (Yoknapatawpha)、ひいてはミシシッピ州の全体までもが低地として捉えられるようになる (SO 77; SR 140)。そのため彼はいずれのテキストにおいても、ミス・ジェニーに幻滅を明かした後から、新しい理想の「丘」としてのヨーロッパへ脱出することを語り始めるのである⁴。

ジェファソンに幻滅するホレスの心の動きを象徴するのは、グッドウィンの収容された監獄付近の街路樹「にわうるし (heaven-tree)」の描写である。彼がジェファソンへの幻滅を吐露する以前を描いたSOの1章とそれに対応するSRの16章において、この樹に関する記述はその「影」に限られる (SO 3, 12; SR 118, 129)。しかしホレスがジェファソンへの幻滅を言明するSOの6章とそれに対応するSRの17章では、この“heaven-tree”は花を散らし、路上で踏みにじられて「粘着性 (vicid)」の「過剰 (surfeitive)」な「瀕死 (moribund)」の甘さといった香りを放ち出すのである (SO 71; SR 131)。ホレスはいずれのテキストでも「奴らは歩道からあの汚いもの片づけるべきなんだ」と言って罵り声をあげており、バルの粘着性、キンストンという低地の湿気に通じるこの「粘着性の汚れ (viscid smears)」の香りを耐えがたく感じていることが示されている (SO 77-78; SR 140)。彼にとっての“heaven”であることを止めたジェファソンは、キンストンと同じように、海老の汁の如く自身に染み込む臭いを発する場に変貌してしまうのである。

両テキストに共通するこうした展開のなかにあっても、ホレスの脳裏にある光景は依然として、SOとSRで低地と「丘」に分裂している。物語の中盤におけるこの分裂は、ホレスがベルに離婚を提起する決意をするという、従来あまり重視されなかった挿話に注目することで確認することができる。

5. ベル宛ての手紙を巡る改稿

『サンクチュアリ』改稿において、ホレスがベルとの離婚を決意し、そのことを彼女に伝える手紙を書く、という挿話に手が加えられていることを指摘する研究はほとんど見当たらない。その原因には、SOとSRいずれのテキストにおいても、ベルに離婚を提起するこの手紙の存在感が極端に希薄であることが挙げられるだろう。どちらのテキストにもこの手紙に対するベルの反応は描かれておらず、ホレス自身もこの手紙を投函した後は、そのことに言及しようとしな。グッドウィンの裁判で検察側に立つユースタス・グラハム (Eustace Graham) から弁護側が勝つ見込みはないということを知り出したナルシッサは、いずれのテキストにおいてもベルに「ホレスは24日には帰る」と手紙を出している (SO 258; SR 279)。彼女の手紙の本文もテキストに登場することはないが、ベルの元へ帰ることを拒否するホレスの手紙は、彼が帰宅することを告げるこのナルシッサの手紙によって打ち消され、表舞台から姿を消してしまうのである。

菊池はSOの手稿とタイプ稿を通覧して比較検証する研究のなかで、ホレスを中心的に描くSOにおいてすら、彼がベルとの離婚を決意して手紙を書くという挿話が唐突なものであることを指摘している。菊池はこの唐突さを解消しようと試み、ルビーを町から排除しようと働きかけるナルシッサに対するホレスの幻滅が、ベルとの離婚の決意を促したのだと解釈している (「手稿本 (VIII)」1-2)。しかし菊池のSOの手紙に関する検証は17章の内容に限られており、6章でホレスが最初にベルに手紙を書こうと考える箇所と言及しておらず (「手稿本 (IV)」66)、不十分なものに留まっている。

たしかに物語の傍流に留まるとはいえ、菊池が一部を取り上げたように、SOにはジェファソンに逗留するホレスがベルと離婚することを決意し、それを手紙で伝えようと考え、実際に手紙を書き出すまでの過程が段階的に

描き込まれていた。改稿の際にこうした箇所はすべて削除されてしまったために、SRではベルとの離婚という話題自体が、ホレスが実際に手紙を書き出すまでテキストに表出することがなくなっている。しかしこの改稿は、決して不要になった挿話をテキストから切り取って後退させるといった類の消極的なものではない。ふたつのテキストにおけるホレスの内的経験の分裂を明確にし、物語の後半においてそれを外的経験の分裂にまで展開してゆく際の、重要な前提として機能するのである。

SOにおいて、ホレスはヨーロッパへの希求を表明しはじめると同時に、ベルに手紙を書くことにも言及しはじめると同時に、SOの6章において、ホレスはまずミス・ジェニーに対して“*When this is over, I think I'll go to Europe. I need a change. Either I or Mississippi does, one.*”とヨーロッパへの希求を述べた後、寝室で“*By God I will go,*”と独白し、付け加えて“*I'll write Belle in the morning.*”と言って、ベルに手紙を書くことを考えはじめると同時に（SO 77）。この6章の段階ではまだ離婚ということが明示されないが、ミス・ジェニーに対して「これが終わったらヨーロッパへ行く」と発言していることを考え合わせれば、手紙を書くホレスの意図は、決してキンストンへ戻るというものではない。幻滅したジェファソンに代わってヨーロッパに理想の「丘」を求めはじめたホレスが書こうとする手紙の内容は、ベルのもとには戻らないという決意を伝えるものだったと考えるのが適当である。

ベルに手紙を書く目的がテキストに明示されるのはSOの17章である。寝室にやって来たナルシッサからルビーをメンフィスへ追いやってキンストンへ帰るよう諭された後、彼は“*I'm going to Europe.... Soon as this business is finished. This damned country. I'll write Belle for a divorce and—*”（SO 199）と独白し、手紙の目的がベルに離婚を提起することであると明かす。この直後、彼は横になっていた寝台から飛び起きて一度は机に向かおうとするのだが、直前のナルシッサとの口論のために今は冷静な手紙など書けないと考え、明日に延期してしまう。

注目すべきは先に見た6章と同様、SOでは17章においても「ベルに手紙を書く」ことが「ヨーロッパへ行く」と結びつけられている点である。改稿の際にこれら「ベルに手紙を書く」までの経緯は完全に削除されるのだが、「ベルに手紙を書く」と結びつけられていたヨーロッパへの希求だけは削除されず、SRにも保持されているのである。

SOの6章に対応するSRの17章において、ホレスはSOでの展開とは異なり、ミス・ジェニーには「ヨーロッパへ行く」ことについて言及せず、代わりに続く寝室の場面で“When this is over, I think I’ll go to Europe,”と独白し、続けて“I need a change. Either I, or Mississippi, one.”と言う(SR 140)。わざわざSOとは異なる展開に書き直されていることから、SRに描き込まれたこのヨーロッパへの希求は、改稿の際にフォークナーの不注意で偶然に削除を免れたホレスの内面吐露といった性質のものではないことが判る。フォークナーは改稿の際、ホレスがベルとの離婚を決意する文脈は注意深く取り除いた一方で、彼がヨーロッパを希求する文脈については生かそうと考え、意図的に保存したのである。「ベルに手紙を書く」ことが低地の湿気から今度こそ脱却しようとする行為であることを考え合わせれば、SRはホレスがジェファソンに幻滅した後も、新しい理想の「丘」を希求するホレスの言動に焦点を絞り続けていることが判る。

こうしたホレスの内的経験の分裂は、彼が実際にベルに手紙を書く時期をふたつのテキストで変化させてゆくことになる。この手紙の執筆と前後して、いずれのテキストにおいてもホレスは、トミー殺害の目撃者である大学生テンプルがポパイに誘拐されてメンフィスの娼館に幽閉されていると知り、彼女を訪れて旧フランス人屋敷に迷い込んだ彼女の経験を聞き、嘔吐するという過程を辿る。ふたつのテキストで分裂したホレスの手紙の執筆の時期は、SOとSRにおけるこの嘔吐の意味を正反対のものに変えてしまうのである。

6. テンプルの語りの影響を巡る改稿

SOの手紙の挿話の唐突さに言及する菊池も、ふたつのテキストでホレスがベルに手紙を書く時期が異なることには触れていない(「手稿本(VIII)」6; 「手稿本(IX)」77)。SOのホレスがベルに手紙を書くのは17章の末尾、彼がクラレンス・スノープス(Clarence Snopes)と取引をして、テンプルの居場所を聞いた後のことである(SO 205)。これは18章でホレスがテンプルを訪ねてメンフィスの娼館を訪れる直前に位置する。一方SRでは、22章でスノープスからテンプルの居場所を聞いた後、ホレスは手紙を書くことなく23章で彼女と会うためにメンフィスへ発ってしまう。SRの22章か

らは、SOでホレスが手紙を書いた段落が完全に削除されているのである(SR 216)。SRのホレスがベルに手紙を書く時期は26章の冒頭、彼がメンフィスからジェファソンに戻って嘔吐した翌朝のことであり、ホレスは書いた直後にこの手紙を投函している(SR 274)。SOにおいても手紙の投函はホレスがメンフィスからジェファソンに戻って嘔吐した翌朝、22章の冒頭で行われる(SO 254)。整理すれば、いずれのテキストでも手紙の投函はホレスがメンフィスから帰宅した翌朝に行なわれるが、SOとSRでは手紙を書く時期だけが、 templeの語りを聞くためにメンフィスへ赴く前から、ジェファソンのベンボウ家に戻って嘔吐した後に書き換えられたのである。

改稿におけるホレスの外的経験の分裂は、これまでに詳述した内的経験の分裂と堅く結びついている。前節で示したように、低地からの脱出に焦点を当てているSOのホレスは一度すでに手紙を書く寸前まで辿り着いているため、いつ実際に手紙を書き始めても不自然でない状態にある。このため彼は低地の湿気から脱却するために手紙を書き、それから templeの語りを聞いて衝撃を受けるという流れを経験する。一方、低地からの脱出に焦点を当てていないSRでは、ベルとの離婚の決意はテキストに表出していないため、なにかホレスに対して行動を促すものとして、読者が納得できる転機が必要となる。こうした要請から手紙を書く場面がメンフィス行きの前から後に書き換えられ、SRのホレスは templeの語りに衝撃を受けることで、ベルと離婚を決意するという経験の流れが生じたのではないかという推測が成り立つ。こうした相違が生じている以上、 templeの語りからホレスが受けた嘔吐するほどの衝撃の意味合いもまた、SOとSRで異なってくることは必然である。

代名詞“she”で示される女性が蹂躙される幻覚的な描写を含むホレスの嘔吐は、SOとSRいずれのテキストにおいても物語の極点のひとつとして重視され、様々に捉えられてきた。しかし、この場面とふたつのテキストにおけるホレスの経験の分裂との影響関係について触れる考察は見当たらない。この場面に対する複数の解釈は主に、匿名の女性が蹂躙される幻覚的光景に対して、嘔吐するホレスがどのような立場にあるのかを巡って展開されている。ホレス自身がこの女性を蹂躙しており、彼の嘔吐は自身の欲望を認めたためだという主張(Langford 20)、ホレスがこの女性に重なって蹂躙されており、嘔吐はその苦痛のためだという主張(Madden 107)、ま

たホレスは客観的な位置から蹂躪者を憎悪と共に幻視しており、彼の嘔吐はその憎悪からくるものであるという主張（菊池「未改訂」10）、解釈は他にもあるが、いずれの理解もここで幻視される女性について、 temple とリトル・ベル、またさらに多くの女性たちが入り混じったイメージであると前提する点では共通している。旧フランス人屋敷でポパイに強姦されてメンフィスの娼館に幽閉された temple の語りを聞き、ジェファソンに戻ってすぐにリトル・ベルの写真を見つめるホレスは、彼の葡萄棚の想像のなかで白い服をまとう彼女もまた、いずれは蹂躪される運命にあると考えるのである。 temple の語りからホレスが受けた衝撃は、彼の「不可侵性」への憧憬に対して深く突き刺さったものであることが伺える。どんな丘もいつかは浸食によって崩れ去るという強迫観念に、ホレスは嘔吐するのである。

このような形をとるホレスの物語と temple の物語の交錯点は、もともと SO において、ホレスの諦念を描くためのものだったことが判る。ホレスは今度こそ低地の湿気の引力から逃れるという決意のもとベルに手紙を書いたが、 temple の語りを聞くことによって、手紙に託した「不可侵性」への甘い理想を信じるのが出来なくなってしまい、失望のために嘔吐するのである。先にも述べたように、この場面と SO と SR で異なるホレスの手紙の執筆時期の関係について、先行研究は触れていない。しかし、ふたつのテキストにおける嘔吐後の展開の違いから、このことを確認することができる。 SO において、こうしたホレスの信念の動揺が描かれるのは 18 章、メンフィスからジェファソンへ戻った彼がリトル・ベルの写真を見つめる前に、自身の書いたベル宛ての手紙が暖炉に立てかけられているのを見つける場面である。この手紙の描写は、ベルとの離婚に託していた低地からの脱却の決意が、 temple の語りによって崩れ去ったことを強く示している。

He found the light and turned it on. Belle's letter was propped on the mantel. He took it up and looked at the superscription, at the small disfigurements which held a name, a juxtaposition of letters which did not move him at all, scrawled there by a hand that had no actual relation to his life. . . . (SO 219-20)

テンブルの語りを聞いた後のホレスにとって、メンフィスに行く前に自身の手で書いた手紙は、「彼の人生とは実際的な関わりを持たない手によって書かれた」「彼にまったく感情を喚起させない文字の並び」に成り果てている。低地から脱出できるという希望はいまの彼にとって、まったく現実感のない夢になってしまったのである。SOではここに示されるホレスの失望が、続けて描かれるリトル・ベルの写真の翳り、そして嘔吐に繋がる流れを形成するのだが、SRのテキストではホレスがこの時点でまだ手紙を書いていないため、当然この箇所は削除されている（SR 234）。

SOの22章の冒頭において、失意のホレスはそれでもベル宛ての手紙を投函している（SO 254）。前節の冒頭に記したように、この手紙に対するベル宛ての反応はテキストにまったく記されない。SOにおいてこのベルの無反応は、ホレスが低地からの脱却の希望を失った以上、この手紙も効果を発揮することなく舞台から退場しなければならないことを示すようでもある。手紙の投函後、ホレスはこれから挑むグッドウィンの裁判に対して、ほとんど投げやりになったような独白をしている。“I’ll go to Europe. . . I’m sick. I’m sick to death. . . What did it matter who killed the man? what became of Goodwin, of her, of a fool little girl, of himself?”（SO 254）これまで離婚について考えると同時に繰り返していた「ヨーロッパへ行く」という言葉には、“When this is over, I think I’ll go to Europe.”（SO 77）また“I’m going to Europe. . . Soon as this business is finished.”（SO 199）というように、必ず「この事件を終わらせる」という意志が併記されていたが、そうした意力は、この時点のホレスからは消え失せてしまっている。SOのホレスは裁判が始まる前のこの時点ですでに、離婚の成立や事件の解決によってベル／キンストン、ナルシッサ／ジェファソンから逃れようとする意志を放棄しているのである。SOは低地の湿気から今度こそ逃れようと家出を繰り返すホレスを辿り、今度も浸食からは逃れることができなかったのだと再び諦めるまでの軌跡を、離婚の手紙の挿話によって描いている。

一方、メンフィスから戻った後でベルに手紙を書くという順序に改稿されたSRにおいて、テンブルの語りはSOとは反対に、ホレスにヨーロッパへの脱出を堅く決意させ、離婚を提起する手紙を書くよう促す役割を担っている。手紙を書く時期の違いを受けたホレスの態度の相違がよく表れているのは、SOの22章に対応するSRの26章において、書き上げたばかり

の手紙を投函したあとの彼の独白である。“I’ll finish this business and then I’ll go to Europe. I am sick. I am too old for this. I was born too old for it, and so I am sick to death for quiet.” (SR 274) なかば投げやりな点はSOの手紙の投函後の独白にも似ているが、SRのホレスはこの時点でも「この仕事を終わらせる」という意志に支え続けられており、SOのホレスの満身創痍といった精神状態とはまったく異なった態度でいることが伺える。SRのホレスはテンプルに「不可侵性」を浸食する湿気の力をまざまざと見せつけられたことで、それら一切を断絶して「不可侵性」を保つ「丘」に脱出するという願望を急速に切実なものにして、文字通りの嘔吐と共に吐き出すように、ベルに離婚を提起するという具体的な行動を起こすのである。「不可侵性」の「丘」へのホレスの希求に焦点を絞ったSRは、ホレスの嘔吐という具体的な反応を契機として、彼の決意を表出させている。ベルに手紙を出すことで低地の浸食と対決する姿勢を明確にしたSRのホレスは、SOとは異なり、グッドウィンの裁判において「不可侵性」への希望を打ち砕かれることになるのである。

7. グッドウィンのリンチを巡る改稿

SOからSRへの改稿において、裁判後の展開が大幅に書き換えられたことは良く知られている。賛否両論を招いたポパイの来歴が加筆されると共に、ホレスとナルシッサの交わす手紙の全文引用が削除され、そこに記されていたホレスのキンストン帰還に関する挿話、またジェファソンでのグッドウィンのリンチに関する記述が、ホレスの行動を捉える描写によって加筆されたのである。特にリンチの場面の加筆がミルゲイトに重視されていることについては、本論1節でも言及した。本論ではこのグッドウィンのリンチに関する改稿についても、SOとSRふたつのテキストにおけるホレスの経験の分裂のひとつと見做し、それがグッドウィンの裁判に失望したホレスがキンストンに去った後で起こる出来事から、彼がキンストンに去る前に起こった出来事に書き換えられた点を重視する。SOのホレスはナルシッサの手紙をキンストンで受け取って初めてグッドウィンのリンチを知ることになるのに対し、SRのホレスは身をもってこのリンチを経験し、それからキンストンへ去ってゆく。このホレスの外的経験の分裂は、SOと

SRにおける彼の物語に異なる結末を与えている。

SOにおいてグッドウィンのリンチは、26章のナルシッサの手紙のなかで幾分か遠まわしに示される。

They took the man away the day after you left. They were getting ready to lynch him, Isom said. So Jefferson is spared that at least. Why they should want to I cant see, since they are going to hang him anyway. So you can save hiring another lawyer. (SO 284)

SOのホレスはキンストンでこの手紙を読むまでグッドウィンがリンチのために連行されたことを知らずにいるため、25章のナルシッサへ宛てた手紙のなかで、自分の代わりに弁護士を探しているから心配するなとルビーに伝えてくれ、と書くのである (SO 283)。SOにおいて作中の出来事に対するホレスの反応が何らかの形で記述されるのは、この25章の手紙で最後となっているため、26章のナルシッサの手紙を受け取って読んだ彼がグッドウィンのリンチを知って何を思うのか、作中で示されることは一切ない。SOはホレスが自身の行動が引き起こした結果を知る前に、幕を閉じるのである。

このようなSOの結末はたびたびアンチ・クライマックスであると指摘されるが (Massey 201; Millgate 116)、むしろ惰性的に家出を繰り返し、今度もまた低地の湿気に引きずられてキンストンに戻ってしまったSOのホレスに相応しいものであるといえる。まだ終結していない状況からルビーを置いて逃げ、別の弁護士を送ることで埋め合わせようとするSOのホレスは、諏訪部の指摘するように、旧フランス人屋敷にテンプルを置いて逃げ去り、他人の車を送ることで埋め合わせようとする大学生ガワン・ステイーヴンズ (Gowan Stevens) に重ねられている (119-20)。ガワンがその後テンプルの経験したことを何も知らないまま、ナルシッサへ宛てた手紙に「自身の愚行によって自身の他には誰も傷つけなかった」(SO 73; SR 135) と書いたように、ジェファソンから逃げ去ったホレスもまた、自身の行動が招いた取り返しのつかない結果を知らないまま、物事がまだ可逆的な状況にあると信じている。ナルシッサの手紙が届くまで、ホレスにとって今度の家出は、繰り返される家出のひとつに埋もれてしまうのである。彼は再び、次

こそはと意気込んで家出を繰り返し、そしてまたキンストンに戻ってくるだろう。これがSOのホレスの惰性の形なのである。今度の家出が招いた不可逆的な事態にホレスが気付くのは、ナルシッサからの手紙を読んだ後のことになる。しかし物語の発端から惰性の円環に囚われるホレスを描いてきたSOにおいて、その瞬間が描かれることはない。ホレスに決定的な影響を及ぼす手紙の到来は、永遠に引き延ばされるのである。

一方SRのホレスは、SOのように惰性に引きずられてキンストンへ帰るのでなく、理想の地へ到達する決意を折られて湿った低地へ戻ったのだということが、改稿によって描き込まれている。グッドウィンに死刑の判決が出た後、SRの29章においてホレスはナルシッサに連れられて一度サートリス家に寄って夕食を摂ってから外へ出る。ジェファソンの駅まで1マイルほど歩いたところで一台の車が通りかかり、彼に乗るよう勧めるのだが、ホレスは“*I’m just walking before supper. . . I’ll turn back soon.*”と断って歩き続ける(SR 307)。SOには存在しなかったこの小さな場面は、しかし物語がホレスのヒッチハイクによる家出から始まったことを考え合わせれば(SR 17)、SRにおいて重要な意味を持つことになる。車に乗るよう勧めた相手に対して、ホレスは明確に嘘をついている。彼がサートリス家で夕食を摂ったことは作中に明記されており、乗車を断る彼の台詞に「夕食前の散歩」という言葉が書き込まれていることは、この嘘を浮き彫りにするのである。SRにおける裁判後のホレスは、ここで明らかに、ヒッチハイクで見知らぬ者と関わり合いになることを避けようとしている。作品の冒頭でヒッチハイクの末に旧フランス人屋敷に辿り着き、トミー殺害事件を巡ってグッドウィンやルビーを助けようとし、結局失敗してグッドウィンを死に至らしめたことの二の舞になるのを恐れるためである。こうした精神状態の彼が、裁判の前には確かに持っていた「ヨーロッパへ行く」という願望をこの後も保持できるはずはない。

ジェファソンの駅前に着いたホレスがグッドウィンのリンチを自身の眼で目撃するというSRの展開は、彼のこうした恐れに追い討ちをかける役割をもっている。この場面で重要なのは、リンチの参加者がホレスをグッドウィンの弁護をした人物だと気づき、彼の元へ向かってくる描写でこの章が終わる点である(SR 311)。まるで凄惨な場面が暗転によって省略されたかの如く、このあと30章でキンストンの駅で列車から降りてくるホレスの

姿が描かれるまで、彼の動向はまったく記述されない。ジェファソンの駅前で命を脅かされていたホレスがどのようにキンストンの駅まで辿り着いたのか、まったく説明されないのである。この演出はホレスがリンチを受けて象徴的に殺害され、キンストンという低地に埋葬されたかのような含みをもつ⁵。その通り、ホレスは今後一切ヨクナパトーフアの物語に姿を現さなくなるのである。

グッドウィンの焼死によって弁護すべき対象を失ったSRのホレスは、当然SOのホレスのように上訴すべく新たな弁護士を探すことはないし、ルビーを慰めるための言葉をもつこともない。自身の行動が招いた結果を目前で見せつけられたSRのホレスは、家出を繰り返すこともないだろう。SRのホレスは理想の「不可侵性」を希求する人物として彷徨し、決定的に挫折する。彼の物語はここで終わるのである。

8. おわりに

以上述べたように、『サンクチュアリ』改稿は、ホレスの内面描写の削除によって彼の人物像をただ単純化したのではなく、彼の言動の志向性を書き換え、また彼の経験する出来事の因果関係を組み換えることによって、SOとSRにおけるホレスの物語を根本的に別のものに仕立て上げていた。SOのホレスの内面描写をSRに適用する解釈が危険であるのは、本論が素描したように、因果関係の変化がホレスの外的経験と共に、彼の内的経験にまで大きく影響を及ぼしているためなのである。

本論はホレスの家出と離婚の手紙に焦点を絞ったが、『サンクチュアリ』改稿におけるテキストの順序の再配置には、未検証箇所が多く残されている。本論が扱った時系列の組み替えによる因果関係の再編だけでなく、作中の出来事を語る順序の入れ替えによるテキストの意味連関の再編も、改稿の重要な一側面として注目されるべきだろう。従来のSOとSRの比較研究は、ホレスの内面の削除やグッドウィンのリンチ、ポパイの来歴の加筆といった改稿による情報の増減を重視する傾向にあったが、今後、こうした因果関係や意味連関を組み換える編集的な改稿がテキストに与える影響をさらに検討することによって、『サンクチュアリ』改稿の実態は、より明確なものとなるはずである。

注

1. 二種類のテキストを統合した『サンクチュアリ』を理解しようとする研究の筆頭に挙げられるのは、SOとSRを同じ物語の異本として扱うジョン・T・マシューズ (John T. Matthews) の解釈だろう (247)。また作中の写真表象を重視するマッデンの読解や (96-98)、SOの手稿とタイプ稿の全体を詳細に比較した菊池による研究も (「未改訂」12, 20)、SOの記述を踏まえたホレス理解を主張している。
2. 『サンクチュアリ』が舞台とする時点の前年を描いた場面における、ナルシッサの義曾祖母ミス・ジェニーの台詞の改稿が根拠に挙げられる。ホレスが家出を繰り返すSOにおいて、彼女はホレスに対して以下のように言う。“I’ve been trying all afternoon to find out myself if he [Horace] has run away again. . . . You [Horace] haven’t quit Belle in three or four years now, have you?” (SO 37-38) 一方ホレスが初めて家出をするSRでは、ミス・ジェニーの台詞は以下のように変化している。“If you [Narcissa] keep on expecting him [Horace] to run off from Belle, he will do it. . . .” (SR 26)
3. 丘と低地という対立項の議論は、従来、ホレスと「悪の論理的な形式 (SO 218; SR 232)」の関係から論じられてきた。クレアンス・ブルックス (Creanth Brooks) の評言を筆頭に、この「悪」はしばしば女性と結び付けられており (129-30)、また本論で「自然の秩序のなかで常に解放されて自身のエネルギーで増殖することを待ちかまえ、分解して破壊する力」という表現を引用したベックも、この力を「悪」に位置づけ、これと対立するホレスを道徳的な人物として扱っている (193-94)。しかし諏訪部が指摘するように、こうした発想は旧南部的な家父長主義のうえで成り立つ道徳であって (123-25, 136-39)、無批判に前提することは受け入れがたく、本論ではホレスの価値観や行動を道徳的な正義の側に位置づけ、彼が対立する力を「悪」と呼称することはしなかった。本論の趣旨はホレスの倫理的妥当性を論じるのではなく、あくまでこうした行動原理を備えたホレスがSOとSRで異なる経験を辿ることによって、どのような物語を形成するかという点にある。
4. 新たな理想の「丘」としてヨーロッパという土地が選ばれたことは、ポークが列挙するように、SOにもSRにもフランスに関する言及が頻発することと関係するよう思われる (“Faulkner” 29-30)。ポークは同時にフォークナーが幼少時からフランス文学に親しんでおり、1925年に渡仏する以前からフランスに興味を抱いていたことを指摘しており (“Faulkner” 30)、またジリアン・モレル (Giliane Morell) は本作の結末に描かれるリュクサンブール公園 (Luxembourg Gardens) がフランス革命時に監獄であったこと、またその後フランスの元老院として「立法の主要部」であったことについて、

渡仏したフォークナーが認識していた可能性を指摘する (353)。弁護士であるホレスがヨーロッパをジェファソンと対照的な、理想の土地の象徴として語る背景には、こうした事情があると考えられる。

5. SRのリンチをホレスの象徴的殺害として捉えるならば、ホレスがリンチに巻き込まれる直前、列車を待つために案内されたホテルの「見本部屋 (Sample Room)」という場所は、31章で死刑に処されるまでポパイの過ごしていたような、ホレスが死を待つための監獄に相当することになる (SR 309)。

参考文献

- Arnold, Edwin T, and Dawn Trouard. *Reading Faulkner: Sanctuary*. U of Mississippi P, 1996.
- Beck, Warren. "Transformation of *Sanctuary*." *Faulkner: Essays*, U of Wisconsin P, 1976, pp. 191-213.
- Brooks, Cleanth. "Discovery of Evil." *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*, Yale UP, 1963, pp. 116-40.
- Faulkner, William. "The Hill." *William Faulkner: Early Prose and Poetry*, edited by Carvel Collins, Little Brown, 1962, pp. 90-92.
- . "Nympholepsy." *A Faulkner Miscellany*, edited by James B. Meriwether, U of Mississippi, 1974, pp. 149-55.
- . *Sanctuary*. 1931. Vintage Books, 1987.
- . *Sanctuary: The Original Text*. Edited by Noel Polk, Random House, 1981.
- 菊池昭「未改訂 *Sanctuary* における Horace Benbow の incestuous な感情をめぐる問題」『ウィリアム・フォークナー』第1巻1号 (1978年) 1-22.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (II)」『小樽商科大学人文研究』第60号 (1980年) 73-90.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (IV)」『小樽商科大学人文研究』第63号 (1982年) 51-70.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (VIII)」『小樽商科大学人文研究』第71号 (1986年) 1-20.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (IX)」『小樽商科大学人文研究』第73号 (1987年) 75-100.
- Langford, Gerald. Introduction. *Faulkner's Revision of Sanctuary: A Collation of the Unrevised Galleys and the Published Book*, by Langford, U of Texas P, 1972, pp. 3-33.
- Madden, David. "Photographs in the 1929 Version of *Sanctuary*." *Faulkner and Popular Culture*, edited by Doreen Fowler and Ann J. Abadie, U of Mississippi P,

1990, pp. 93-109.

Massey, Linton. "Notes on the Unrevised Galleys of Faulkner's *Sanctuary*." *Studies in Bibliography*, vol. 8, 1956, pp. 195-208.

Matthews, John T. "The Elliptical Nature of *Sanctuary*." *Novel: A Forum on Fiction*, vol. 17, no. 3, 1984, pp. 246-65.

Millgate, Michael. "*Sanctuary*." *The Achievement of William Faulkner*, Random House, 1966, pp. 113-23.

Morell, Giliane. "The Last Scene of *Sanctuary*." *The Mississippi Quarterly*, vol. 25, no. 3, 1972, pp. 351-55.

Polk, Noel. "Faulkner in the Luxembourg Gardens." *Etudes Faulkneriennes I: Sanctuary*, edited by Michel Gresset, Presses universitaires de Rennes, 1996, pp. 27-34.

———. Introduction. *Sanctuary: The Holograph Manuscript and Miscellaneous Pages*, edited by Polk, vol. 1, 1987, pp. vii-xi. *William Faulkner Manuscripts*, vol. 8, Garland Publishing, 1986-87.

諏訪部浩一 「「母」から「父」へー『サンクチュアリ』』『ウィリアム・フォークナーの詩学 1930-1936』（松柏社, 2008年）109-84.

（専修大学大学院生）

okadahiloki@gmail.com